

# 花王教員フェローシップ「ユカタン半島のサボテンとラン」体験報告書

■ 報告者：木村秋津（東京都・星美学園小学校教諭）

□ 調査日：2004年8月3日-8月10日

## 1.はじめに

これからどんな日々が始まるのかなと、不安と期待を胸に成田空港を旅立った。私にとってアジアを出るのは初めてのこと。

8月3日 メリダ空港で調査チームの方々と合流を果たした。いよいよプロジェクト体験の始まりだ。



## 2.プロジェクト体験から学んだこと

### (1)自然の厳しさ

メキシコお太陽の威力には驚いた。正午頃、頭の真上に太陽が位置し、影の長さはほんの数10センチほど。この太陽に照らされながら生きている植物は、種族ごとに身を守る工夫をしているのだろうと想像した。

特に印象的だったのは、サボテンの鋭い針と葉の厚さである。調査活動の為にフィールドを歩いていると、ときどき針がズボンを貫通して肌を刺す。その痛さといったらない。また、葉を触ってみると、肉厚の葉にはサボテンが必死で蓄えているであろう水分が感じられた。

日本で目にしていたサボテンの姿との違いに驚いた。それと同時に、厳しい自然と共存する為の植物の必死な姿に心動かされた。



### (2)連鎖して広がる環境破壊

私たちのチームの調査対象植物は、Coc-cothrinax だった。木の高さ、葉の直径、同種間の距離を測定し、記録する。調査を行うフィールドによって、その結果はまちまちだが、ひとつ気になることがあった。それは、どのフィールドも土壌が荒れていることである。海が近いので、塩分によって土壌が荒れることも考えられるようだ。

海が汚染されれば、土壌も汚染される。土壌にごみが投棄されても同様である。現に、ごみの不法投棄が目立ち、目を覆いたくなる

場所もあった。また、立ち枯れや、他種によって駆逐されて枯れてしまった植物もあった。

この状況を目の当りにしたとき、恥ずかしいことながら、私は環境破壊が進行していることを再認識した。

## 3.今回の体験が学校教育にもたらすもの

### (1)地球環境について考え続けること

調査活動中や移動中に、ごみが不法投棄されている場所をよく目にした。この背景には、ごみ収集方法が深く関連しているのではないかと考えた。滞在したシチュルでは、個人単位でいつでも分別しないで、ごみ捨て場に持って行き、その都度小銭を払うという仕組みになっていた。もしも費用をどこかで浮かせようとする人がいれば、このシステムはうまく稼働しなくなるであろう。

Photo: © Akitsu Kimura

担任している 4 年生の自動に、体験談を話しながら、ごみのことにもふれた。すると、「自然がいっぱいあるからこそ捨てられるんだよ。東京で捨てれば見つかったらもう。」という声が聞こえてきた。納得させられながらも、何とも皮肉な現実を子供なりに感じているようだった。メキシコ人の研究者や同じチームの仲間からも、居住地のごみ収集方法を聞くことができた。ごみの処理について社会科で学習する 4 年生にとって、何よりのおみやげになった。



## (2)自然が五感を研ぎ澄ます

チーム合流前に、私は航空会社の手違いでスーツケースを一時的に紛失した。3 日後に荷物と再会した私よりも、他のメンバーの喜びの表現は激しかった。また、片言の英語で何とか話をしようとする私に、労を厭わず耳を貸してくださり、自然の美しさとともに味わうことができた。

異国の人々とひとつ屋根の下に暮らしながら、共感することの素晴らしさを実感できた。植物の調査をするとき、当然のことだが身を屈めたり、ときには、地面に腰をおろすこともある。立ったままの状態では見えなかった小さな虫、植物にも眼がとまるようになる。また、鳥の鳴き声に耳をすませること、特に星を眺めながら感じた静寂さを忘れることはできない。

今後子どもと接していく中で、ときには同じ高さの視線で物事をともに考え、ともに感動することがあるだろう。ときには、よくよく耳をすませて、子どもの心の叫びを聞き取るときもあるだろう。今回のメキシコでの体験は、私が教員として、人間として生きていく為に大切なことを、厳しい自然や人とのかかわりを通して教えてくれた。

そして人間もサボテンなどと同じ、地球に住む仲間なのだということを再認識させてくれた。このことを継続的に子どもたちに話していき、確実に伝えたい。



## 4.おわりに

言葉では表せないくらいの感動を味わったこの夏。ほんの少し気持ちが大らかになった気がする。それは、メキシコの大自然とすてきな仲間がもたらしてくれたものではないだろうか。貴重な体験をさせていただいたことに感謝致します。ありがとうございました。

